

々如_二嚴下電_一矣

牛若殿 義經の雅名也一本云保元三年夏母常盤の夢に大威徳明王牛に乗て來り彼牛忽に利劔と化す此利劔を賜はると見て懐胎す于_レ時平治元年二月二日洛北紫竹の里にて誕生ある依而牛若丸と號す云々

機謙は 千壽に注す松明は鶴飼に記す

勢はややく神もおもてをむくへき様ぞなき やうやく神は行厄神を云歟蓋云行疫神は人死を受るの日遊行する神也云々 沙石集云行疫神の異類異形なる數を不知來て或山僧に障礙をなす時に此僧聞頓止觀の文を誦しければ鬼神悉く退散すと云々文略 今案 唐韻曰厄災也又阻難也困也矣

漢書曰一元之中陽厄五陰厄四陽爲_レ早陰爲_レ水災註云一元四千五百歲爲一元矣 是世の人の年の厄難をもいへり陰陽二の中陽厄尤勢つよかるへし依_レ之陽厄神とは云也

獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手をくたき 是は兵法の手の名也 法華涌出品曰諸佛師子奮迅力矣 大般若五十二曰師子奮迅二昧者於_二諸垢穢_一縱任_二

棄捨_二如_二師子王自在奮迅_一奮迅振_二毛羽_一狀矣 大明法數曰師子奮迅者借_レ譬以顯_レ法如_二世師子奮迅_一爲_二三事_一故一爲_二奮_一除塵土二能前走却走捷疾異_二於諸獸_一此三昧亦如_レ是矣 或云兵法書に源義經虎亂飛鳥翔の秘術を書せり今の戸田山崎が兵法の手也云々 一云新陰流兵法に燕飛と云手あり又神道流に鳥飛と云手あり是等飛鳥の翔の手と等し云々 其外手をひ太刀を捨具足をうははれ 張契を初め手下の者共判官殿に切立られ心爰にあらざれば手に持たる物も忘れ皆肝をけしたる躰成べし 具足とは武具の總名也 鶉鷲記云五百騎がまつさきにすむで目にあまる程の大具足共閃かし立てかければ云々

盜も命のありてこそあらまようやひかんとて あらまようとはあらはやうと云に同じあらおもしろなどいへるあら也まようは枝葉也本の義に非ず末の沙汰也と云事なり依て枝葉と書太平記に荒枝葉と有謠の意は橋次が荷物に目をかけず其外にぬすむべき寶はいくらも有べし根本の命がありてこそなれあらまようやとはいへる也枝葉の字漢文にも

備書にもいでたり記表記云子曰君子不以_レ辭盡_レ人故天下有道則行有_二枝葉_一天下無道則辭有_二枝葉_一矣

うしろめたくもひきけるが 伊勢物語云昔男色このみなりける女にあへりけりうしろめたくやおもひけん_二と云々愚見抄云うしろめたくは無_二心元_一なりと云々 眞字本に後目痛と書 古今秘抄に影護と書河海抄に影護と書○嵐_二後拾_一ふく太山の里の女郎花うしろめたくも歸る今日哉藤原元眞

物々しその冠者が 冠者とは少年ならずよき程の若者を云也桐つばの巻に源氏元服の後冠者君といへり元服して俗體の定まりたる程の若き人を冠者といふべし又官者と書てみやづかひとよむ職原抄に官者は藏人所の内侍を云也天子のそばにつかはるゝをいふ但爰にては冠者の方を用ゆへし 物々しとは一物ある人を云也○山_二深みこくらき嶺の梢_一より物々しくも渡る嵐か

折妻戸をこたてにとつて 一枚折の妻戸或は二枚折の妻戸と云あり葵上に注す 総而兵法軍術にも勝たかひにかゝるを待けるが

負の時敵の位を見る事肝要也兵法口傳に不_レ待不_レ掛長短間と云事あり此等をふくませたり

いらつて熊坂さそくをふみ さそくは早速と書歟又左足とも書歟兵法に先左の足より踏出すを習ひとする也 いらつとは兵法傳云敵に向時虚實を見て進退取捨の心得あり一切の勝負いらつ方は虚也不_レ動方は實也牛若は不動心に住して神變不思議の兵法の達者也一年五條の橋にて千人切せし時辨慶と渡りあひ終に辨慶をえたかへ主従の契約ありて牛若君をはるゝ鞍馬山迄おくり奉る辨慶長刀を横たへうしろに付そひ參しに牛若終に後を見むき給はす恐れ給ふ事なし辨慶是を感せし也牛若は兵法の達人なれば地住の足下なとといふ秘術にも至り給へる歟まして熊坂などがいらつてかゝる長刀の手掌の物を取より安して終に熊坂討れたり

爰の面廊 面廊とは權現造りの拜の屋を云也爰にては座敷へ行所の廊をいふ成へし かけろふ稻妻水の月かや姿は見れ共手にとられす かけろふは源氏供養に注す 七書尉繚傳曰輕者如

レ露奮敵若驚矣●目には見て手にはとられぬ月
の中の桂のことき妹をいかにせん
夕つげも告渡る 湯谷に注す

鉢木

正五位下相摸守平朝臣時頼桓武天皇十代後胤北條
遠江守平時政五代後葉也父修理亮時氏と號す母は
秋田城介景盛女松下禪尼と號す天下の副將軍とし
て古今無双の賢將たり建長八年十一月廿三日相州
山内の最明寺にて落鎧あり法名を覺了房道崇と改
む世に最明寺殿と云り山内最明寺は絶て其跡に禪
興寺を道崇の建立也則此所に最明寺殿を葬る也東
鑑云弘長三年十一月廿二日戌刻入道時頼年卅七西
明寺の北亭にて卒す臨終の儀着衣袈裟登繩床
座禪し聊動搖の氣なし頌云業鏡高懸卅七年一槌打
碎大道恒然と同廿三日に葬禮す文略 時頼入道の政
道理非分明にして奉行頭人評定の輩聊私のはから
ひなかりしかは聖風二たびあらはるゝかと万民安
堵の思ひをなしけりされ共諸國の守護人地頭等邪

欲非道のみ有て訴論更に決せざれば時頼入道是を
歎き世に惡逆私欲の者或は謀反の輩死罪を蒙る事
自致所といひなから私徳うすく政道に叶さる故也
今は嫡子時宗成長して政務にうとからす廉直の男
なれば政を預けんにさのみあやうかるましとて其
身一室にとちこもり出入の人々は青砥左衛門藤綱
二階堂入道なにかし只二人に極て文應二年秋の末
俄に死去と號し給ひ二階堂一人召具しひそかに鎌
倉を去のひ出六十餘州を修行し給ふ事三ヶ年在々
所々を廻給ふ其跡にて時頼の葬送追善まめやかに
取おこなひ給ひ叔廻國の後鎌倉へ歸て家人の惡事
を正し給へは諸人舌をふるひておそれけるとそ
九代記
行衛定めぬ道なればこしかたいづくならまし 此
こしかたは越る方なり次第の心明かに聞えたり
是は一所不住の沙門にて候 一所不住とは最明寺
殿廻國修行の身の上を云也沙門は田村に注す
信濃國は兼平に注す鎌倉は鶴飼に記す信濃なる淺間
の嶽に立煙は業平歌也杜若に注す
大炊山ともの里離れ坂 何れも信濃の内也上野へ

行道也

碓日川

橋有左に妙義山へ行道あり碓氷峠は信濃
と上野の堺也柏崎に注す

下す筏の板鼻や佐野のわたりに着にけり 板鼻は
上野也板が鼻共云安中より三十町あなた也板鼻よ
り佐野迄は十七里餘有佐野へ行道は高崎より廿町

計東にあり道より西に佐野村有舟橋を渡せし川に
橋をつなきし木也とて近き比迄有しといへり今は
なし恒世が舊宅佐野にあり 新古今増抄云筏とは
木をからみ合て舟のこととして山川を流す也それ
を棹にてさしくたす人を筏士と云也云々惣而所の
名に鼻と云は高くさし出たる處を云也山城に山鼻
竹が鼻丹波に猪の鼻など所々に多し 大原紀行云
こゝをしも山鼻と云事は大原の道に分ゆくに山の
有はしめにて河原にさし出て高く見ゆる故に人に
よそへて山ならば鼻ならんと云成べし云々
急候程に上野國佐野のわたりに着て候 上野國は

舊事本紀云上毛野國造瑞籙朝皇子豊城入彦命孫彦
狹島命初治平東方十二國爲封矣下毛野國造難
波高津朝御世元分三毛野國爲上下二豊城命四世孫

奈良別初賜國造矣大和本紀云上野下野とは彼兩
國の中間に佐野笠懸野とて二の野原あり其野中に
一河あり渡瀬と號す又佐野の中河とて是あり此野
を一方に寄れば國狭き故に彼兩野の中なる渡瀬河
東をば下野と號するなり又野の西を上野と云河より
東を下に付しかは上野下野といへり但野の字をつ
けとよむは本文には非すつけのよみは假名書のよ
み也又義よみにてつけと云也云々 或云昔は上毛
野下毛野とて毛の字を添たり毛とは有田云毛後
毛の字を除といへり 字彙云毛草也矣穀梁傳曰凡
地之所生謂之毛一矣

あふつたる雪哉いかに世にある人の面白う候らん
面白うとは雪の色によせていへり 徒然草に雪の
面白う降りたりし朝と書るに等し 色葉字類抄云
鉛粉 玉塵 恒組と書 説文曰雪冬雨矣大戴禮曰
天地積陰温則爲雨寒爲雪矣五經通義曰陽則散
爲雨水寒則凝爲雪霜皆從地而昇者也矣面白
と云詞は三輪に注す
雪似鵝毛飛散亂人被鶴毳立徘徊 此詩は白氏

文集三十三卷にあり鶴とは鳥の名也格物論曰鶴有蒼白二色一緑眼黃喙紅掌矣 詩の心は雪の降は鶴毛の散亂れたるに似たる也鶴鷺の毛也雪に逢人鶴鷺を被たるやうなると景氣をのべたり徘徊とはたちもとおるとよめり 韻會云徘徊不進貌矣漢高后紀曰徘徊往來矣

袖せはき細布衣陸奥のけふの寒さをいかにせん

「陸奥のけふの細布はとせはみむねあひかたき戀もする哉 奥義抄云みちのくにのけふの郡より出くる布なりはたばりせはき布なればむねあはずとはいふなりと云々 無名抄云けふの細布と云は陸奥に鳥の毛して織ける布也多からぬ物にておる布なればはたはりもせばくひろも短ければ上にきる事はなくて小袖などのやうに下にきる也されはせな計をかくしてむね迄はかゝらぬよしをよむなり云々綺語抄云みちのくのみつきものとははたりせはくいてやしき布ありといへり文略

是より十八町あなたに山本の里とてよき泊りの候十八町あなたとは日光へ行道を指て云也山本の宿共云也 貞享三年丙寅正月廿四日御會「立のほる

煙そえるへ此あさけ雪に道なき山本の里幸仁 値遇は盛久に注すなふくは江口に注す

駒とめて袖打拂ふかけもなしさのゝわたりの雪の夕くれケ様によみしは大和路や三輪が崎なる佐野のわたり 新古今集冬部に定家卿歌也 東野州云此歌は萬葉の降くる雨か三輪が崎の歌をとり雨さへくるしと讀るにいはんや雪の夕はといひさしたる歌也と云々自讃歌注云萬葉にくるしくも降くる雨か中略と云歌をとり袖うちらはらふかけもなしとかへ雨を雪にかへてよめり此歌を本歌をとれる歌の本といへり云々私云此歌の佐野のわたりは上野の佐野には非ず大和也依て大和路や三輪が崎なるさのゝわたりとつゝけたりさのゝ舟橋と云時は上野也さのゝわたりと云時は大和也 萬葉集第三長忌寸麻呂歌に「苦しくも降くる雨か三輪の崎さのゝわたりに家もあらなくに 五代集歌枕云三輪が崎は大和國云々萬葉仙覺抄云此三輪の崎は近江歟近江に三和社あり云々 詞林采葉云近江大和兩説不決云々一説三輪が崎は和州三輪山の南の尾さき也佐野の渡りも此河といへり

是は東路の佐野のわたり ○東路のさのゝ舟橋か

けてのみ思ひ渡ると知人のなき源等

一樹の陰の宿りは千壽に注す草枕は安達原に注す

夢より霜や結ふらん ○夢路迄人めはかれぬ草の

原おきあかす霜にむすほれつゝ

折節是に粟の食の候ほとに 粟の食はわひしき食

物也 公孫弘傳云身食ニ肉ニ脱ニ粟飯ニ矣 又云晏

嬰相ニ齊時食ニ脱粟飯ニ矣

惣而此粟、申物は古へ世にありし時は歌によみ詩に

作り 和漢共にむかしの文に粟飯の事多し神代卷

にも粟飯の沙汰あり案するに上古の文を見るに米

の沙汰はなくして只粟を用たり昔は米を粟といひ

たる歟文粹第一源順詩花色如蒸粟下略 女郎花

に注す

○千早振神の社しなかりせは春日の野邊に粟まか

ましを

實や盧生が見し榮花の夢は五十年その邯鄲の假枕此

詞邯鄲に注す

夢にも昔を見るならば慰事も有へきに 世傳最明

寺殿粟飯少し聞召誠にねふり給はんも夜さむにて

目もあはされば二階堂にひそかによる聞せ給ひける「白妙の雪に心はなくさまて浮事つもる旅枕かな

某が秘藏にて候得共 書註曰某名也臣諱君故言

某凡不知名與不取行其者皆曰某矣祖庭

事苑云某如甘木上指其實也然猶未足定

其名矣秘藏涅槃經疏曰隱故名秘覆故名藏矣

仙人につかへし雪山の薪か社あらめ

是は世尊因位の時雪山において仙人につかへ給ひ

し事をいへり 仙人者 釋名曰老不死曰仙仙遷

也遷入レ山也故制レ字人傍山也矣 楞嚴經曰有十

種仙一皆壽千萬歲數盡復入三輪廻一爲不三曾了得真

性一與六道衆生同名七趣一是皆輪廻中人也矣

寒山詩云鏡汝得仙人一恰似守レ戸鬼一矣 雪山者

西域記云揭職國雪山王城西北二百餘里至大雪

山一山頂有池請レ雨祈晴隨レ求果願云々山谷高深

峯巖危險風雪相繼盛夏含凍積雪彌谷蹊徑難涉

山神鬼味暴維妖崇群盜橫行殺害爲務矣

窓の梅の北面は雪封してさむきにも

和漢朗詠集云藤原篤茂詩云池凍東頭風度解窓梅北

面雪封寒矣

見じといふ人社うけれ山里の折かけ垣の梅をたに

○山里の折かけ垣の梅の花いかなる人の見しといふらん菅家

家櫻きりくべてひさくらになすぞかなしき

連歌南談抄云家櫻は都又居所などの櫻也と云々

一説山にあるを山櫻といひ里にあるを家櫻と云也と云々

○垣こしに見るあた人の家櫻花散計行ておらはや

松は本来煙にて薪となるも理りや 松の煙とは元

來松は諸木の中に殊に煙の多きもの也依て和漢共に

松の油煙を以て墨に作る也詩にも歌にも松の煙を

詠するは遠山の松の青きを煙にたとへて松の煙とつゝくる也

或説に春みとり立比松かさのやう成もの生じて長

ては白き粉の風散亂するを松の煙といへり是は俗説

俗説ならん百練抄云寛元四年七月四日北野一夜松

此四五日烟立給矣

みかきもり衛士のたく火はおためなり 玄旨百人

一首抄云御垣守は内裏の御垣を守る者也衛士は左衛門の下につかふ士也左衛門は外衛の御垣を守る也

○御垣守衛士のたく火の夜はもへて晝はきへつゝ

是社佐野源左衛門常世がなれる果にて候

何とてケ様の散々の跡には御成候ぞ 源左衛門常世は上州佐野住人

常世が古城は當國天明と云所にあり佐野の近所也

又下野國平井村に太平權現と云社有當社は常世が靈を祭ると云々

最明寺殿ケ様に尋給ひし時常世が答申けるは佐野藤太常俊と申者我爲には伯父なるが一族共をかた

らひ有夜ひそかに某が父を殺し佐野三郎こそ狂氣になりて自害せし旨申上一族として某を追出し本

領を押領せられケ様の身と成果ぬ親の敵とねらひ候へ共かれらは多勢我はひとりにて候へは力及ばず

打過候と申上る也

なふそれは何とて鎌倉へ御上り候て其御沙汰は候は

公方の縁になり申さん 公方と云詞は最明寺殿時代にはなき事也

或云應安七年九月將軍義詮の御子義満公は自西國歸洛し給ふ則天下泰平に依て永

徳元年の春後醍醐院初て將軍の亭へ行幸成て義満を任太政大臣自是號公方其後三十八歳にて入道し號鹿苑院道義

武家を公方と云事はより始る也

東八ヶ國の大名小名 坂東八ヶ國は盛久に注す

大名小名と云は大人の名譽を崇呼で大名と云也異朝にては諸侯を大名と云見左傳莊子曰語大功立大名此朝廷之士也

糸毛の具足 常の糸を以て威したる具足也糸を毛と云也昔は革を以て只今の糸のこととおどしたる也是を糸にて綴したる故に糸毛と云也糸の色二色に

おどしたるを二毛といひて嫌ふ事也

唐韻曰障泥鞍飾也矣 西京雜記曰玫瑰鞍以綠地錦爲蔽泥後稍以熊羆皮爲之矣 延喜式曰凡羆皮障泥聽五位以上者之

足よは車 湯谷に注す

ぬそして運の盡る所か最明寺殿さへ修行に御出候上は候 最明寺殿さへ御逝去にて評定衆は閑居なればたとへ御訴訟申ともいかに其甲斐候へきと常世がいひたる也此唄に最明寺殿さへ修行に御出候と

うたふは相違せり

沙汰者音義曰沙汰則如沙中漣洗其金取精妙上矣杜子美上韋左相詩沙汰江河濁集註曰沙汰以篩貯沙去其細而存其大曰汰矣心は沙を汰て細なるを去り大なるをおさむることく理非分明に辨ふるを云也

着到につき 着到書様之事 曾我簡見抄云鬪勢着到の口に年號月日何之鬪勢着到之覺と書て誰殿幾千騎幾百騎誰殿幾十騎と書也

只頼め我世中にあらんほと 田村に注す

けうかる法師なり 是は最明寺殿の詞なるを自身に法師といへるは不埒也案するに謠の本文に法師と書は誤也芳志也芳はかうはしきと訓ず志はこゝろさし也言心は常世が深切の響應を稱美していへる詞也又けうがるとはけうは希有と書まれにあると云義也

論曲拾葉抄卷二十

さら星のことくなみ居たり 王勃滕王閣序曰雄州

霧列俊彩星馳臺榭枕_二夷夏之交_一 上下略

目をひき指をさしわらひ

日本紀云美女之膝矣同

私記注云睪視良也矣

さび長刀やうように横たへ

或説にやうようは揚

腰と書おちふれたる常世なれば腰はそくなるとい

ふ事歎此説よろしからすやうようの字要用と書て

然るへしさびたる長刀にても時の要に用たる成へ

し

塵添塔囊抄云太刀刀のさびと云字は精の字をさひ

とよむ又鉛をもさひに用ゆ順和名には鐵_一 書て

かねのさびとよめり云々

神妙 舟辨慶に注す

いで其時の鉢木は梅櫻松にて有しよな其返報に加賀

に梅田越中に櫻井上野に松枝合せて三ヶの庄 い

での字は景清に注す加賀國は佛原に注す越中は山

姑に注す上野は上に記す私云加賀國に梅田と云所

有又上野に松井田と云所有坂本より二里あなた也

但し越中に櫻井と云所いまた不知追て尋ぬへし

唄の心は梅櫻松の枝を切くべてあてまいらせし其

返報に三ヶ國の庄を賜し也依て梅田とは梅枝也え

だのえの字を略して梅だと云り櫻井とは櫻え也え

は枝也櫻えを櫻井となへたり又松井田を松枝と

いひかへたり皆木の枝にならへていへり唄の作

者奇妙の文法也

子々孫々に至る迄 詩楚茨篇曰子々孫々勿替引

之矣爾雅曰子之子爲孫孫之子爲曾孫曾孫之子

爲玄孫_一矣 曾孫を夜志和吳と訓す

安堵 史記高祖本紀曰諸吏人皆案堵如_レ故註應劭

云案次第堵堵也矣 文選曰百姓安堵四民不_レ反

業註呂延濟云堵堵也安堵堵不_レ失_一家業_一矣家に

堵をしまはして盜賊も亂にいらざるやうにしたる

を安堵すると云也

悦びの眉をひらきつゝ 愁はしき時は聚眉とて眉

一處による也悦時は眉の間のふる也 夕顔卷云お

のれひとりえみのまゆをひらくと云々

○數々に君がたよりて引なれば柳のまゆは今ぞひ

らくる

かみつけや佐野の舟橋取はなれし 舟橋に注す和

論語云康元々年十一月廿三日時頼出家して最明寺

道崇と申けるが何事も天下の政皆相摸守に讓給ひ

て萬心の儘におはしける時諸國をめぐりて人の邪

正をみかみつかたに訴あけぬ事も衰へたる身には

多かるらんとて同年十一月十五日の夜斗敷の聖と

なり諸國を廻給ひしに攝津國難波の津にして人の

知行押領せられし後家の所に宿をかり給ひしが彼

後家が歎く事有しをよそながら委く聞て我かく斗

敷の聖と成て諸國をめくるは此事也といと哀れに

覺して曉方に宿を出られしが彼後家が夫の位牌の

うらに一首の和歌を書て出給ひし「難波濁沙干に

遠き月影の又もとの江にすまさらめやは

同年十二月廿一日鎌倉に歸り給ひて相摸守殿へ申

させおはしまして彼後家をめし出し夫の本領を下

し給ふと也 已上島山土岐

佐々貴家日記

猩々

周の國の傍羊唾と云所に禹鳳と云者始て市を建て

酒を賣常に正直にして利潤をとらず然るに夜々來

て酒を買もあり姿常の人にあらす面色紅にしてう

るはしく頭は荊蕪のことし又酒を飲事限りなし禹

鳳問云汝はいづくの者名は如何と問れば何をか

憶むへき大海の頭に住猩々と云者也明夕海陽の江

の邊に來て我を待べしといひて失_レ時_一教のことく海

陽の江に來て見れば彼化生の者浪間近く來て大き

なる瓶を抱て濱邊にすへおきうたひ舞て酒をのむ

其後此瓶に篠を相そへて禹鳳にあたへけり家に歸

りて彼瓶を見るに清々たる酒壺中にたへたり篠

の葉を門の邊に立て此酒をうれ共_一つ_一きず飲人

齡をのべ病をいやす事かきりなし禹鳳たのしひさ

かへ羊唾の市にきはひにけりと云々 已上藤訓往來

之抄古注文釋

本草綱目云時珍曰猩々出_レ哀牢夷及交趾封溪縣山

谷中_一狀如_レ狗及獼猴_一黃毛如_レ獺白耳如_レ家人面人

足長髮頭端端正聲如_レ兒啼_一亦如_レ犬吠_一成_レ群_一阮_一汧

曰封溪俚人以_レ酒及草履_一置_レ道側_一猩々見即呼_レ人

祖先姓名_一罵_レ之而去_レ須後相與_レ背_一酒着_レ履_一因而被_レ

擒檻而養_レ之將_レ烹_一則推_レ其肥者_一泣而遣_レ之西胡取_レ

其血_一染_レ毛_一罽_一不_レ鬪_一刺_レ血_一必_レ鏐_一而問_レ其數_一至_レ一

斗_一乃已矣

禮記云猩々能言郭義恭廣志云猩々不能_レ言山海經

云狸々能知人言三説不同矣

是はもろこしかね金山の麓 かね金山とは唐土に
徑山といふもあれは此きん山は金の字の金山にて
あるぞと云事也大明一統志卷十一云中郡鎮江府金
山在府城西北七里江中宋周必大筆錄此山江環繞
每大風四起勢若浮動唐有裴頭陀於此開山得
金賜名金山矣

私云一統志を見るに唐土に金山と云所凡十六ヶ所
有今爰にうたふ金山は何れ歟是なる

楊子の里にかうふうと申民にて候 楊子の里は楊
州府の楊子江を云歟庭訓抄には羊睡とあり又かう
ふうも禹鳳と有 一統志卷十二云中郡揚州府楊子
江在義真縣南經通泰二州入于海矣 私云金
山は在鎮江府楊子江は在揚州府然るを金山の
麓と云事相違せる歟但一統志の圖を見るに揚州府
鎮江府相並ひたり猶尋ぬへし

扱も我親に孝あるにより 爾雅云善事父母曰
孝矣 孟子曰仁之實事親是也矣曾子曰孝慈者百
行之先莫過於孝孝至於天則風雨順時孝至於
於地則萬物化盛孝至於人衆福來臻矣

楊子の市に出て酒を賣ならば 説文曰市買賣所

之也又凡貿易買賣皆曰市矣 史記云神農氏教人
日中爲市交易而退矣 宋吳處厚青箱雜記云嶺南
人呼市爲墟墟巷市之所所在有入則滿無入則虛而
嶺南村市滿時少虛時多故謂之墟矣 柳文云越
廬人矣 神代卷云一書云天照太神天磐戸に入給
へは夜晝のわかちなきゆへ八十萬の神を天の高市
に神つどへにつどひ給ふと云々 是諸神集會の義
也此等日本の市のはしめならん

時去時來りけるにや 史記封禪書曰時去時來々則
風肅然也矣

今日は薄陽の江に出て彼狸々をまたはやと存候
一統志卷五十二云薄陽江在九江府城北源自岷
山至此下流四十里合彭蠡湖水東流入海矣
老せぬや藥の名をも菊の水 ○露なから折てかさ
ん菊の花老せぬ秋の久しかるへき興風
見きとく名もことほりや秋風の 壽慶連歌の發
句に

「秋の月名もことほりの光かな
秋は春より三季にあたれば名も斷や秋とはつつけ

たり 酒を三季と云は冬春夏也或は三寸三木共書
也

古酒記云三季とは酒は冬本を作り春こそ時に濁り
夏清り依て三季といふ云々 江次第抄云酒訓三
寸一者飲酒則邪風去皮膚三寸矣 岷江入楚云三
季とは冬作りて春熟し夏のむ也仍三季と書又三寸
とは酒をのめば邪氣三寸身にちかつかず寸をきと
云は馬なとをも四寸五寸と云也又三木とは杜康と
云者の妻男の外へ行ける間に男の日々の飯を園木
のみつまたにそなへ置けるに雨露にうるほひ酒と
成ける也是を樹伯に祭る云々 日本紀私記云神酒
和語美和矣 呂氏春秋云狄儀作酒醴變五味矣
戰國策云昔狄儀作酒而美進之於禹矣
博物志云杜康造酒矣 魏武帝云何以解我憂惟
有杜康 注杜康善造酒康以酒日死故酒日不飲
酒會客矣 今案黃帝內傳に酒の事あり又素問に
も出たり酒と云事は昔よりあれ共米穀を制して作
るは狄儀杜康が始めたりと見ゆ
舊事紀云素戔嗚尊脚摩乳手摩乳をして八瓊八瓊の
酒を釀さしむと云々 神宮雜例集云神戶人夫進

神田以稻作神酒矣此等日本にて酒の始め也酒
をさけ共さか共さ、共となふるは皆音相通也 萬
葉仙覺抄云酒をさかと云はさかゆと云詞也酒宴は
皆人さかへたのしむゆへ也と云々

ことほりや白菊のきせわたを温めて きせ綿とは
菊の霜おほひなり 源氏幻卷云九日綿おほひたる
菊を御覽じてと云々 枕草子云菊の露もこちたく
そぼちおほひたる綿などもいたくぬれと云々世談
問答云一條冬良公御記に菊にわたをきする事いつ
れの頃より始るとも見え侍らす只菊をもてあそぶ
のあまり寒霜をふせがんとの心指と覺え侍る云々
○垣ねなる菊のさせわた今朝見ればまたき盛の花
の咲けり
月星は隈もなし 隈の字は阿とも曲とも隈とも書
或は山隈川隈といへり山隈とは山の尾のまかりた
る所を云川隈は岸のまかれる所を云或は水のよど
む所也 説文曰隈水曲隈也矣 爾雅云厓内爲隈
厓外爲隈矣 月星は隈もなしとは曇りなき也
塵添瑤臺鈔云月のくまなきと云は曇るをくまと云
海の曲たる所をくまと云も影に成所の名也阿の字

をば庭曲と釋し隈の字を水曲也といへり云々
新羅註合
○くまもなき月は水と見えなからさ浪よするま
かの唐崎其敬

蘆の葉の笛を吹 笛は阿志布惠と訓す 廣韻曰笛
北方之人卷蘆葉而吹矣 事物紀原曰杜肇笛賦序
云昔伯陽避亂入我懷土遂建新樂矣 漢舊錄
曰胡人卷蘆葉吹之故曰胡笛亦曰李伯陽入西
戎所造矣 李陵答子卿書曰側耳遠聽胡笛互
動牧馬非鳴晨坐聽之不覺淚下矣 笛は胡人の吹
所依て胡笛と云也

波の鼓 白樂天に記す
秋の調 律の調也呂を春とし律を秋とす又沙陀調
平調大食調等は秋の調子也 ○老のふるをねにた
てよとや今宵さは秋の調の聲のかきりを
萬代迄の竹の葉の酒 文選註曰竹葉酒也矣 百詠
註云宣城出竹葉酒矣 本草綱目云竹葉酒治諸
風熱病清心暢意淡竹葉煎汁釀酒飲矣
故實名目云昔竹葉を二本の木のうちほの雨水に漬
して酒を作り出せり其三本の木は杉の木也今酒屋
に相葉を出すは此故也又酒を見きと云は三本の木

の義也竹葉と云も是也と云々
或云漢朝に劉石と云者繼母我實子には善飯食を
たへ劉石には糟糠の飯をあたふ劉石是を不食し
て木の股に捨自然に雨水落積て後芳しかりければ
劉石試之其味美也竹葉を折て指覆國王に献す因
酒を云竹葉云々
○竹の葉にまくきの菊を折そへて花をふくめる玉
の盃盛す
入江にかれたつ足もてはよろくと 枯たつ蘆と
いひかけたり ○難波江や波こそ春のわか葉より
枯たつ蘆を見えてすくなき光輝

室松岩雄
古内三千代校
保持照次

謠曲拾葉抄終

大正貳年八月五日印刷
大正貳年八月拾日發行

定價金貳圓也

著作權所有
不許翻刻複製

校訂編輯者 室松岩雄
發行者 株式會社 皇學書院
代表者 目黒和三郎
印刷者 鈴木梅太郎
印刷所 東京市神田區松下町七番地
東京市神田區松下町七番地
合資會社 横田印刷所

發行所

東京市麴町區飯田町五丁目八番地
株式會社 皇學書院

63

85₁

終